髙橋耕平 キュレーション

ALLNIGHT HAPS 2017 後期「接触の運用」

#5 小林耕平＋髙橋耕平　2018年3月30日(金)〜4月23日(月)

18:00〜9:30（翌日朝）

接触の運用の往復　小林耕平＋髙橋耕平 , 2018年制作, ミクストメディア

①高橋《絵 - 接触の肯定から始める》
照らされることのない時間に見えざる場所で繰り広げらる留まることのない接触の連なりと切れ。先ず全方向の接触行為それ自体を肯定し、そこから何事も始める。その為の絵。

⬇

②小林《壁画を観るための猫型洞窟》
高橋の壁画①を洞窟壁画として捉え、壁画を鑑賞するための持ち運び可能な洞窟を作ることにした。この洞窟に顔をうずめると、両手はこの洞窟の身体を抱きかかえることになる。その抱き心地が猫を抱いたときの感覚に近いことから猫型洞窟と名付けた。

⬇

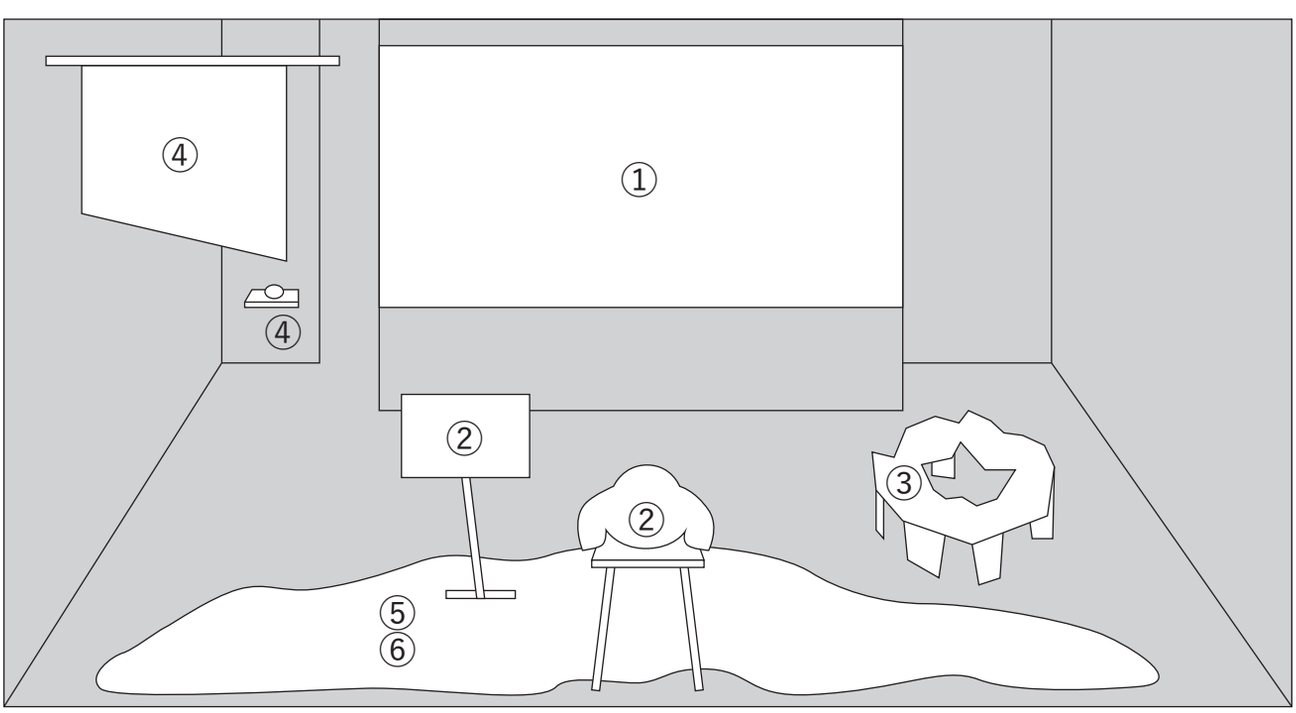
③高橋《労働 - 穴に仕える》
顔を覆い先の絵を見る為の猫型洞窟と同じく、顔を覆いながら穴に仕える労働について考えをめぐらす。不可視な物との接触を気にしながら穴のあいた建物に交代で身を入れる。我々が生きている内には到底解決することが出来ないであろう問題について誰かが労働すること。その造形として。

⬇

④小林《天猫姥口鎌の模刻による解像度の劣化》
天猫姥口鎌（てんみょううばぐちかま）は、織田信長が戦功のあった柴田勝家に与えた茶道具。窪んだ口の形状が歯の抜けた老婆の口に見えたことから姥口と呼ばれる。労働の対価として物を与える。そのためには、一国一城に匹敵する価値を物に付けることになる。（藤田美術館蔵）

⬇

⑤高橋《道にぼた餅》
道に落とされたこれらを手にすることにより予期せぬ物事に接近する。

⬇

⑥小林《拾い集めた物と地面の間に土の塊を差し込む》